



殘

骸

寬
明
庵

今日も雨昨日も雨さうして日一日と冷く降つてゆく秋雨は銀線の微かに擦れ合ふやうに悲しい顫動を波立たせて周圍を通して染まつてきた。

雨滴の音が絶え間も無い、俺はジーと瞳を凝らす一滴二滴ポトポトと窓に當つてはスーッと硝子を流れる………蝸牛の匍つた跡の様に………

俺は窓越しに野や山の秋雨に濡れてゐるのを眺めてゐる。俺は幽かに息をついた。

見張つてゐた目がポーッと曇る腫が次第に細くなる。頭の中で様々のものが舞踊を始める。

我が長所そんな事を考えるぞ知らず悲しさがこみあげてくる俺にはそんな物がある物かど何か言ふ。

親切な俺達の先輩は「お前の流れは危いよ、氣を付けなくてはいけないよ」斯ふ云ふて俺達の軀を身動き一つ出来ない程に抱きしめて岸に立つてゐる。

そして俺達が成る可く河に入らないやうにはげしい水の渦や、岩にはねかへる水音を見たり聞いたりしない様にしてゐる、然し俺達は一生この河を游がずに濟むだらうか俺達の周圍には實も葉も枝ももぎつくされた樹の枯幹と火の様に焼爛れた赤地があるばかりだ仙人でない俺達は生きる爲だけに河向ひの森へ木の實をもどめて游がねばならない。

俺の心は俺に言ふ、

「人云ふ者は何か一つの事に勝れてゐなければならぬ」

無意識に球を轉ばすやうに出たこの一言は實に人間としてのゴールドエッグスの一つである。

これ程尊いものはない。

黄金の卵……所有者は一人の人間である

而かもそれは頭の混亂し切つた俺に放たれた光だ。

平凡な言葉だけれどそれが俺の耳を通つた時丁度神宣の様な尊い力強い嚴肅な氣を以て俺を壓したのであつたその時の俺の心は弱い者だつた丁度障子を圍らせた城壁の様に何處からでも突入られる弱さがあつた。

そして俺の城壁は今の一言に依つてたわいもなく破壊された。大きいと思つた城内の全てのもものは大海の一

滴に外ならなかつた。凡てが残骸となつた。

力強い一言と俺の残骸のみが残された……

俺の城壁は自己の力で改築しなければならぬ。

あゝ俺の精神は自己の力で改革せねばならぬ。

俺達の周圍は俺達に告げる

「青春時代の初期は人生の最も幸福なる時だ」

なるほど俺達は人生の朝ばらけの中に生きてゐる俺達の前には長い一日がある、しかし長い時があればある

ほど俺達のなすべき仕事は大きいのだ。脳水晶と精力のありたけをしばらく盡してもたりない大きな仕事がある

俺達はこの世の中を少しでもより良いものにする爲に……自分一個の立場としても……それ等を

太陽の光輝により多く浴せなければならぬ。

むごたらしい現實の悲哀に惱ませられ乍らも尙生きやうと藻掻くのはこの希望をのけものにして他に何があ

るだらうか……

俺達は俺達の個性を信じねばならぬ

俺の個性は只一つの俺の所有である人はその外に何物をも所有してゐない

俺達は自己只一つの個性をより強く信ずる爲に：……………より大きく愛する爲に：……………則ちより偉大な生

に觸るゝ爲に：……………個性をより良く養はねばならぬ。

俺は俺の個性が何んな形であらうとも悲まない。

只より異形……………より強大である事を欲するのだ

ステチルは斯んな事を言ふた。

「神はエゴイストの最大なるものである」

俺達は偉人の何れの點を敬愛するか。

偉人とは個性の最も偏長した者である。

家庭や學校や社會は偉人を稱讚する而かも俺達の個性を削り取らうとしてゐる。

現今の教育とは個性を削減する事だ。

家庭教育とは子供の個性をして親達の平凡性と同一ならしめる事だ。

學校教育とは總ての生徒をして均一に教師もしくは學校の同型に仕立て上げる事だ。

社會教育とは個性をして傳統と習慣の道具にかけて法律の文不文軌上にころがすことだ。

修養とは自己の手も足も喰ひ盡くしたタコ^{タコ}のやうに赤くなつて人の排出した思想に入りかはる事だ。

自分で自分を殺し切つた人、その人は最も修養のつまれた人である。

よい例證を望む人は軍人を觀察するがよい。

彼等は武器ではあり得る、然し人間ではない。

自他稱して國家の干城と云ふてゐるではないか。

あゝ俺達の個性はかくして失はれ様としてゐる、然し土に依て倒るれば起きるにもやはり土に依らねばなら

ぬ俺達は失はれんとする個性を教育の土臺に依て築き上にやならない。

自己の城壁は自己の力に依りて改革せねばならない。

自己の個性は自己の力で改革せねばならない。

俺は殘骸の上に立ち敵の凱歌に和せなければならなかつた。

「人は何か一つの事に勝れてゐなければならぬ」

それは自己の個性をよりよく發揮する事に依つて生命付けられるものだ。

これが俺が求めんとする凡てゝある。

新に城壁を圍み俺はその上に高く輝く力強い所の天主閣を築き上げなければならぬ、そして自己と云ふものを明かにしたい。

俺は俺として一番偉い者になりたい。

自己完成は人間として最も氣高い仕事である。

而かも全くの人の進む可き只一つの道だ。

俺達は神である必要はない!!

然し人間として最大のものであらねばならぬ。

かう考え及んだ時

冷い吾人のブレストは温い血潮の流れるのを感じた。『終り』

